

峠三吉『原爆詩集』論

—原子爆弾と広島表現—

『原爆詩集』の強調、又はテーマ、は次の通り、三分に分けることができる。

- 1・広島に落とされた原子爆弾
- 2・広島の原子爆弾の後
- 3・原子爆弾が再び使われないことの望み

詩集の一番目の部分、つまり広島に落とされた原子爆弾についての部分、が一番大きな課題である。

①・広島に落とされた原子爆弾

峠の広島との関係は親愛なるよしみで、都市を昔からの友達とみなす。しかし、原爆はこの友情を破滅に落とし入れた。峠の広島とのよしみは色々な所で示された。例えば、「序」という最初の詩はひらがなで書いてあって、この書き方はこの親ぶくを例証する。漢字を使ったら、感じはちょっと形式的になるが、ひらがなだったら、心やすい。その上、漢字の代わりにひらがなを使うことは詩を一般的にする。つまり、誰でも「序」という詩を書けるし、誰でも読める。

「序」以外の所にも証言がある。「夜」という詩で、峠が「ひろしまよ」を書く。疑いもなく、この行はなくなった親友への悲しい声である。そして、「死」という詩で、次の行が現れる。

〈ヒロちゃん ヒロちゃん〉

この名前が「広島」の読み方の最初の半分と同じであることは確かに偶然ではない。だから、〈ヒロちゃん〉は峠の好きな都市への呼びである。

とにかく、原子爆弾の前の広島は峠の好きな都市であった。しかし、広島に落とされた世界の最初の原爆は全部を以前と違うようにした。つまり、都市も市民も変えた。光の時に、広島は「であった広島」（「八月六日」という詩からの引用）になって、原爆の後の広島は昔の広島とは全く違うようになった。「友」で、この行がある。

〈ここはどこ、どんなところですか？〉

つまり、原爆後の広島はこの人が知っていた広島から想像できないほど変わった。この行にはもう一つの意味がある。これは、原爆ではなくて原爆後の再建のために見覚えのない都市になったことである。その次に、「河のある風景」で、この描写が現れる。

燃えあがる焔は波の面に
くだけ落ちるひびきは解放御料の山壁に
そして
落日はすでに動かず
河流は　そうそうと風に波立つ

この引用は広島という都市についてであるが、広島は全然述べられていない。

ダックワース・ネイサン

峠三吉『原爆詩集』

その代わりに、述べられたのは自然しかない。どうしてかと言うと、広島という都市がなくなって、自然しか残っていないことである。落日の燃え上がる光は原爆後の火事と似ている。

原子爆弾が変えたのは都市だけではなくて、広島市民である。峠はよくこの変化を述べる。例えば、「序」で「わたしをかえせ」を書く。意味は、原爆のせいで分からないほどに皆が変化されたことである。峠がほしいのは、原爆の前の自分である。しかし、この人、つまり原爆を知らない自分、はなくなった。まだ生きている人も原爆に感動させた。死んだ人の方の運がいいかも知れなかった。

戦争との関係がない子供も変えた。「倉庫の記録」という詩で、次の記述がある。

女学校の下級生だが、顔から全身へかけての火傷や、赤チン、凝血、油薬、包帯などのために汚穢な変貌をしてももの乞の老婆の群のよう。

つまり、原子爆弾はこの若い女の子を老婆に変えた。峠は「仮包帯所にて」で他の女学生を描写する。

ああみんなさまほどまでは愛らしい
女学生だったことを
たれがほんとうと思えよう

普通の形は憎むべき形になることが『原爆詩集』の一般的なテーマである。この女学生は父や母、弟、妹が自分を知らないほどに違うようになった。峠が書くのは、

そしてあなたたちは
すでに自分がどんなすがたで
にんげんから遠いものにされはてて
しまっているかを知らない

である。確かにそうである。この人たちはもう人間じゃなくて、「分からぬ一群」（「八月六日」）になって来た。ほしいことや行為は人間的であるが、人間ではない。目しかなくなった。

ああ、今は眼だけで炎えるじゃくじゃくと腐った肉かい
もげ落ちたにんげんの印形（「眼」）

原子爆弾は普通の人間を幽霊みたいなものにした。体だけではなくて記憶も破壊させて、威厳を失った。汚物に横たわって、水を慕ってばかりであった。

「みず 水だわ！ ああうれしいわ （「倉庫の記録」）

その次、「ある婦人へ」で例がある。「婦人」という言葉は高級の感じであって、原爆の前この婦人の暮らし向きはよかったかも知れない。けれども、原爆後のこの婦人は違う。

溝露路の奥にあなたはかくれ住み
あの夏以来一年ばかり
雨の日の傘にかくれる
病院通い

これは芭蕉の俳句とちょっと似ていると思う。憂うつな感じである。原爆のせいで、婦人の顔は傷付くし、心も傷付く。雨の日しかに病院へ行かない。「崩れる家で住んで、崩れる生活をする。」

都市と市民の変化の要約が次の行になる。

ダックワース・ネイサン

峠三吉『原爆詩集』

たれがほんとうと思えよう（「仮包帯所にて」からの引用）

原爆後の広島と広島市民は、原爆の前の物と同じであることを信じられないほど異様である。

詩集の一番大きな部分は原爆のおそろしさの描写である。原爆が落とされた後、八月六日は不自然な日であって、一番不自然なのは都市の無言であった。「八月六日」という詩で書いてあるのは、

すでに動くものもなく
異臭のよどんだなかで
金ダライにとぶ蠅の羽音だけ

30万の全市をしめた
あの静寂が忘れえようか

である。広島は30万人の都市であるが、蠅以外何も動かない。「倉庫の記録」で、子供の両親よりも蠅が動く。

蠅のたまり場となっている。

広島が臭い。死の異臭である。「炎の季節」でも、都市の静かさは述べられた。

人くさくて
人の絶えた
何里四万かの
死寂。

人間がいるが、いる人間は死んだ。何かができる人間はいない。何かをしているの、つまり生きているの、は炎しかない。

焰の舌が這い廻り、
にんげんの
めくられた皮膚をなめ

言うまでもなく、原爆の時に死んだ人以外の人は悩んだ。すぐになくなった人より、原子爆弾の2、3日後死んだ人の方が運の悪いかも知れない。他の人は、汚物に横たわって、ついに痛んで死んだ。次の行は描写する「八月六日」からの引用である。

両手を胸に
くずれた脳漿を踏み
焼け焦げた布を腰にまとして
泣きながら群れ歩いた裸体の行列

「死」の詩で似ている描写がある。そして、「倉庫の記録」は詳しく生き残った者の死亡を述べる。確かにこの詩は倉庫の記録ではなくて、死亡の記録である。人たちがなくなって、最初に込んでいる倉庫はだんだんに空ろになる。詩が「倉庫の記録」というが、普通に倉庫の中にある物、つまり品物、の記録ではなくて、倉庫の中にいる人間の記録である。生き残った人間は品物とは変わらない。

峠が地獄、つまり普通の宗教の反対、のイメージをよく使う。聖書に次の引用が書いてある。

"And God said, Let us make man in our image, after our
likeness; and let them have dominion over the fish of the sea,
and over the fowl of the air, and over the cattle, and over

ダックワース・ネイサン

峠三吉『原爆詩集』

all the earth, and over every creeping thing that creepeth
upon the earth.

So God created man in his own image, in the image of God
created he him; male and female created he them.

And God saw every thing that he had made, and, behold, it was
very good. And the evening and the morning were the sixth day."

しかし、他の六日、つまり1945年八月六日、原子爆弾は広島に落とされた。
峠の意見は「炎」と言う詩にある。

1945, Aug. 6

まひるの中の真夜
人間が神に加えた
たしかな火刑。

広島の前爆で、人間は、人間に神神がもう必要ないことを見せた。確かに、原爆は天国を征服してしまった。これを分からせるために、「ちいさい子」という詩で、

あか黒い雲が立ちのぼり
天頂でまくれひろがる

の行がある。ところが、一番強い鬼神を思い出させるイメージは「死」という詩にある。こんなに大変なイメージは疑いなく神との関係ない。

どこから現れたか
手と手をつなぎ
盆踊りのぐるぐる廻りをつつける
裸のむすめたち

地獄の光景は、「炎の季節」にある。この描写は原爆後の広島の前様がもういない感じをはっきり分からせる。

雲・

雲・

雲・

赤・橙・紫

雲の変な色は確かにものすごく不自然で、広島の前爆が分からせるのは、人間に神神がもう必要ないこと以外、人間が自然に逆らって自然を使うことができるようになったことである。その時、広島の前爆は世界中の一番計り知れない力があるものであって、地球も天頂を征服した。太陽でも恐怖ですくんだ。

裸の太陽の雲のむこうえふるえ（「ちいさい子」）

結局、自然の太陽はもう必要ない。その代わりに、「人工の太陽」（「朝」）がある。この新しい太陽は広島だけの太陽である。

ウラニュームU235号は

予定されたヒロシマの

上空500米に

人工の太陽を出現させ（「炎の季節」）

ダックワース・ネイサン

峠三吉『原爆詩集』

しかし、この人工の太陽は慈善心はなくて、「呪いの太陽」（「呼びかけ」）である。ウラニウムU235号で、人間は自然と勢力争いをしたが、結果は、人間が作った物が自然より強いこととなった。最後に、峠は真実を認識できる。この大変な真実はものすごく簡単である。

〈ああそれは偶然ではない、天災ではない（「その日はいつか」）

本当に、人間には自然がもう必要ない。原爆の前は、都市を断絶させることができるのは自然の地震や火事であったが、原爆後の今はそんな天災はいらなくて、その代わりに人間自身がいつでも都市を滅ぼせる。上記の簡単な陳述の示すのは、峠の怒りである。同じ詩に、他の明らかな陳述が出て来る。

日本列島の上、広島、長崎をえらんで投下され
のたうち消えた40万きょうだいの1人として
君は死ぬる。〉

こういう簡単で明らかな陳述は峠のメッセージを強くする。メッセージは、原爆が日本に落とされて、苦しんで死んだ人が40万で、大変であったということである。その上、人工の物のせいであった。やはり、「朝」に書いてあるように、人間の知っている事が進んだ。

噴火する地脈 震動する地殻のちからを殺戮にしか使いえぬ
にんげんの皮をかぶった豚どもが
子供たちの絵物語りにだけのこって

この人間は自然の力を使わなければならなかったが、原爆時代の人間は自然対自然の力を使えるほど進んでいた。昔の人間の武器は石だったが、今は我々の信じられなく大きいウラニウムの力になった。

つまり、軍隊と同じ力がある爆弾を作れるほどに進んでいた。言うまでもなく、広島は原爆が普通の軍隊の代わりに使われた。だから、軍隊のイメージが所々に見える。例えば、「炎」に次の行がある。

藻のように ゆれゆれ
つきすすむ炎の群列。

本当の軍隊じゃない。でも、本当の軍隊より大変である。藻というのは、水や涼しさを暗示するのであるが、原爆の投下後は水も涼しさも全然なかった。

既に述べたように、原爆の後の広島は前と全然違う。実際は、広島が広島の異様なパロディーになったことである。このパロディーが表されるのは色々な方法がある。最初に、広島の市民、つまり人間、が動物になったことがある。例えば、「仮包帯上にて」という詩に、この行がある。

つぎつぎととび出し這い出し

普通は、飛び出し這い出すのは人間じゃなくて、昆虫であるが、広島は原爆の後、普通はもう普通ではない。ただし、「炎の季節」に、次の行が出て来る。

（ああ あれたちは
魚ではないから
黙って腹をかえすわけにはゆかぬ

広島は市民はピキニにあった実験に参加させた魚や動物と同じに見られたが、都市の市民は魚じゃなくて、動物であるので、原爆が引き起こしたような遅い死亡は信じられないほどに痛くて苦しい。

そして、「炎の季節」に、

巣をこわされた蟻のように
と

かつて人間だった
生きものの行列。

という行もある。二番目の引用は全部を説明する。つまり、原爆後の人間は実際に人間ではなくて、「生きもの」になった。この描写は私にダンテの『インフェーの』とボーデライヤの詩からの行を思い出させる。

"Fourmillante cite, cite des rêves..."

日本語にすると、意味は、「蟻の都市、夢の都市」となるが、広島という都市はボーデライヤのと全然違う。ボーデライヤの都市は夢の都市であるが、広島は夢魔の都市である。実は、広島の状態は夢魔よりずっと大変であろう。しかし、私にとって一番似ている引用は T.S.エリオットから来る。

"Unreal City,
Under the brown fog of a winter dawn,
A crowd flowed over London Bridge, so many,
I had not thought death had undone so many.
Sighs, short and infrequent, were exhaled,
And each man fixed his eyes before his feet." ("The Waste Land", I)

もし「The brown fog of a winter dawn」を「The blue sky of a summer morn」に、「London Bridge」を「Aioi Bridge」に書き直したら、エリオットが書いたロンドンの説明は広島のものになれる。

そして、都市が人間になったことがある。例えば、「仮包帯所にて」という詩に、次の行がある。

焼け爛れたヒロシマの

ところが、普通の都市は爛れない。爛れるのは都市ではなくて、人間であるが、原爆の後、何も普通ではない。そして、「影」の詩に、広島の新しいビルは皮膚の病氣として描写された。

焼けては建ち、たっては壊れ皮センのように広がる

言うまでもなく、詩集で広島は広島の市民の象徴である。つまり、時折に、広島についての行は本当に都市の広島じゃなくて、広島の人々についての行である。例えば、「焼け爛れたヒロシマの」という行で、爛れているのは広島じゃなくて広島の市民である。

一般的なメッセージは、何でも前と違うことである。例えば、「景観」に次の行がある。

おお生きている原子族
人間ならぬ人間

正確であるね。原爆後の人間はもう人間ではない。このように、広島は都市ならぬ都市で、少年は子供ならぬ子供などである。「生きている」という言葉を使って、峠がするのは、この原子族の人間がまだ死んでいないことを強調することである。死んだ方がよかったかも知れないという意味を示している。

原子爆弾が全部を変えたのは勿論である。昔に大切なものはもう妥当じゃない。「微笑」という詩に次の行がある。

あの朝以来 敵も味方も 空襲も火も

ダックワース・ネイサン

峠三吉『原爆詩集』

かわりを失い
あれほど欲した 砂糖も米も
もう用がなく

要点は「もう用がなく」という行である。原爆の投下は「あの朝」で、「今」と比べるのは面白い。つまり、既に述べたように、全てが違ってしまった。原爆は名前を使う必要がないほど大変だった。「あの時」と言うのは十分である。

原爆が「普通」を「不思議」に変えた。都市が荒廃した、つまり建物が大体崩されたけど、「炎の季節」に書いてあるように、

白骨と煉瓦屑をならして
たしかに
3尺ばかり
高くなったヒロシマ

である。

他の変わったことは天気イメージである。「八月六日」に峠が朝日を述べる。普通は、朝日が新鮮であるが、原爆後の朝日は全然違った。

誰がたれとも分からぬ一群の上に朝日がさせば

今日、朝日が死の都市に輝く。しかし、太陽だけではない。空も変になった。八月六日の空は、「ばかみtainな青い空」である（「としとったお母さん」）。天気がいい日であるが、地球にある地獄の広島は違う。空がそんなに青いのは不適當である。

確かに、太陽についての苦痛イメージがよく出て来る。原爆後の太陽は無慈悲に見えて、太陽の暑さは人々の苦しみを増す。例えば、「火の季節」には、次の行が出て来る。

日が焼けつく、

広島は全市は苦しい都市でも、太陽がやわらかくならない。無情な日である。又は、

影一つないまひるの日ざしが照し出している、

という行が「その日はいつか」によめる。太陽は厳しく無慈悲である。この影がないことは「としとったお母さん」にも出て来る。

あの照りつけるまいにちを
杖ついたあなたの手をひき
さがし歩いた影のないひろしま

人工の太陽が広島を破壊したし、原爆後の自然な太陽が全然広島市民を哀れまない。確かに、『原爆詩集』で苦痛のあるイメージがたくさんあるのである。

「盲目」という詩に、峠が広島と言う地獄を描写するのであるが、突然、詩の真ん中に次の正常の幻影がある。

（嬰兒と共の妻 のほほえみ
透明な産室の 窓ぎわの朝餉）

多分、「盲目」という題が実際ではなくて、隠喩である。つまり、盲目は全然見えないことじゃなくて、広島で起こったのを理解できない、又は理解したくない、ことであるかも知れない。結局、原爆の力が理解できないほど大変であった。

原爆の力は確かに悪質である。無差別な爆弾であった。例えば、お婆さんが、煉瓦の山の中に死んでいた家族を探さなければならぬようにした。

あの照りつけるまいにちを
杖ついたあなたの手をひき
さがし歩いた影のないひろしま
瓦の山をこえ崩れた橋をつたい
西から東、南から北

そして、言うまでもなく、原子爆弾の力は信じられないほど強かった。全部を
圧倒したり、自然の美や平和でもを全く破壊したりできたほど強かった。「仮包
帯所にて」に次の行がある。

(一瞬に垣根の花はちぎれいまは灰の跡さえわからない)

平和を象徴する花は消した。

「ちいさい子」に、次の行が出て来る。

くっきりと空を映すおまえの瞳のうしろで
いきなり
あか黒い雲が立ちのぼり
天頂でまくれひろがる
あの音のない光りの異変

青空であることは原爆の恐怖を強くする。雲がない空から、人工の雲が音もな
く落とされた。

峠の意見では、原爆の最悪の恐怖は子供が殺されたことである。彼にとって、
原爆の落下は大変な実験みたいである。「墓標」に書いてあるように、

やわらかい手が
ちいさな首が
石や鉄や古い材木の下で血を噴き
どんなにたやすくつぶれたことか

痛みが信じられないほど押しつぶされた。けれども、外面がいつもと同じであ
った。「その日はいつか」に描写されるこれも恐ろしいことである。

広島を中心、ここ紙屋町広場の一隅に
かたづけ残されころがった 君よ、

．．．

君は 少女らしく腰をくの字にまげ
小鳥のように両手で大地にしがみつ

．．．

爛れたあとも血のいろも見えぬが

日は静かで平和である。つまり、外面は普通の広島の日である。しかし、
外面は外面で、内面は全然違う。上記の引用をもう一行を入れたら、

君は 少女らしく腰をくの字にまげ
小鳥のように両手で大地にしがみつ
半ば伏さって死んでいる、

になるのである。最後の行の「死んでいる」は要点である。外面は平和である
が、内面は、鳥みたいな罪のない少女が大変な爆弾に痛々しく殺されたことであ
る。少女の死の暴力を示すのは、「死のくるしみが押し出した少しの便」しか
ない。それ以外、全部がいつものようである。

「その日はいつか」の少女は鳥のようであると峠が書いたけど、他の鳥のイメ

ダックワース・ネイサン

峠三吉『原爆詩集』

ージは苦しいイメージである。例えば、「ある婦人へ」に、こういう鳥のイメージがある。

透明なB29の影が
いきなり顔に墜ちかかった
閃光の傷痕は
眼から鼻へ塊りついて

つまり、傷痕は平和の鳥ではなくて、猛禽みたいである。人を探し苦しめる能動的なものである。とにかく、この傷痕のせいで、昔に美しかったある婦人は次のようになる。

爬虫のような隆起と
柔毛本生えぬてらてらの皮膚が
うすあかい夕日の中で

つまり、彼女も「人間ならぬ人間」になった。爬虫類の方が似ている。夕日さえ普通の反対になった。というのは、普通の夕日の光りは物を美しくするのであるが、この原爆後の夕日は婦人の禿や爬虫類のような皮膚を強調する。やはりB29から墜ちかかった傷痕は確かに広島平和の鳥じゃない。

夕日の後は夜で、この時は「河のある風景」に述べられる。

すでに落日は都市に冷い

朝の青空や太陽が夜になって、広島は恐怖や苦しみと孤独である。朝が夜になったように、原爆の前のにぎやかな広島が音もない都市になった。夜の中、恐ろしく静かな感じがある。

しかし、広島が静かなのは、市民がよく寝られるということではない。地獄のイメージが目の前に浮かぶ。例えば、「眼」という詩に、

うごいた眼が、ほろりと透明な液をこぼし

又は、「死」に、

爪が燃え
腫がとれ
せなかに貼りついた鉛の溶飯

と言う行がある。でも、苦しいイメージだけでなく、悲しいイメージもある。例は「ととったお母さん」に見える。

ばかみたいな青い空に
なんにも
なんにもなく
ひと筋しろい煙だけが
ながながとあがっていたが……

空を見ると、全部がいつものようだと思えるが、煙がこういう思いが間違うということを示す。ゆっくり上がっている煙は静かであるが、暴力的な破壊の象徴である。朝の原爆の後、広島が静かになったが、残っている煙は長引いている死亡を思い出させるのである。

他の大切なテーマは、どうして原子爆弾が広島に落とされたかという質問である。

何故こんな目に遭わねばならぬのか
なぜこんなめにあわねばならぬのか

何の為に
 なんのために

どうしてこんなに大変な爆弾が落とされたかの質問である。峠の考えでは、理由は全然なかった。彼が、何をするために落とされたかを分かれぬ。峠のように、「としをとったお母さん」も分かれぬ。

どうしてわしらあこのような
 つらいめにあわにゃならんのか」

意味が色々ある。戦争自身も原子爆弾も「このようなつらい」ものである。どれか、我々は分からない。両方かも知れない。そして、「墓標」で、次の行がある。

(ああいったいどんなわるいいたずらをしたというのだ)

峠が尋ねるのは、なぜ子供が戦争に巻き込まれたのだろうか、戦争に巻き込まれるような悪いことを子供がしたのだろうかという問いである。正しい答えは勿論、悪いことをしなかったし、戦争と関係ないのである。しかし、真実は子供が悪いことをしなくても戦争に含まれる。どうしてかと峠が尋ねる。

ところが、詩集の一番目の部分、つまり広島に落とされた原子爆弾についての部分、の一番広い強調はペーソスというテーマである。落とされた原爆がしたのは広島をなくすることだけではなくて、個人の生活を破壊することでもある。

原爆後の広島は勿論全く破壊された都市であったが、この信じられない荒廃の中に広島市民が哀れに正常を守ろうとした。例えば、「としとったお母さん」に、次の行が出て来る。

みかん箱の仏壇のまえ

そして、「倉庫の記録」に、下記の引用がある。

6 日め

むこうの柱のかげで全身の包帯から眼だけ出している若い工員が、ほそぼそと「君が代」をうたう。

全部が破壊されたけど、この若い人に日本への信用はまだ残っている。しかし、ほそぼそと歌っているというのは、力も母国の信用も段々なくなっていることを示す。これが私に「Song among the ruins」という小説を思い出させる。一般に、日本が米国と戦争できることの間違った信用がある。例えば、「倉庫の記録」に書いてるように、

「敵の B 2 9 が何だ、われに零戦、はやてがある一敵はつけあがっている、もうすこし、みんなもうすこしの辛棒だー」

と絶えだえの熱い息。

でも、広島をなくしたのは、この B 2 9 であった。峠が書いたように、こういう話は絶え絶えの熱い息である。

そして、子供の墓標がある。碑文は、「斉美小学校戦災児童の霊」で、小学生の墓標であることは、普通よりも悲劇である。子供しかないというのは、大人が子供を考えないで逃げたことを暗示する。この子供が大人の戦争に参加していて、これを示すのは次の行である。

<ほしがりません・

かつまでは>

けれども、死んだのは大人がいらない戦争を理解しないことである。児童、つ

ダックワース・ネイサン

峠三吉『原爆詩集』

まり活力、が腐っている墓標になった。「墓標」に書いてあるように、幼時を盗まれた。

リンゴも匂わない
 アメダマもしゃぶれない
 祖父や祖母にとって、孫の死亡は信じられない。
 お婆ちゃんは
 おまつりみたいな平和祭になんかゆくものかと
 いまもおまえのことを待ち
 おじいさまは
 むくげの木蔭に
 こっそりおまえの古靴をかくしている

結局、自分の孫より長く生きるのは不自然である。「としとったお母さん」の話と似ている。家族がなくなっても、お婆さんは生き残した。家族の形見は、色あせた写真しかないし、家族の死亡の詳細を聞かなければならない。母性の努力や祖母になることの嬉しさは無駄であった。これがよく述べるのは、原爆の出鱈目の破壊や生命の空費である。「その日はいつか」という詩もこの生活の空費を描写する。話を直接にする「君」を使って、詩が成人している少女を述べるが、彼女の将来は結局恐ろしく避けられない。住んでいる宇品でも戦争の関係がある。簡単に言えば、「少女のその手、そのからだ」対「狂いまわる戦争の力」ならば、結果が避けられない。

しかし、状態がよくないのに、この少女が家族と自分を育てて最善をつくした。お母さんがなくなってから、少女が母親をつとめた。

母のないあと鋳物職人の父さんと、幼い弟妹たちの母がわり
 その上、日本人に家を引き倒されたこと見たことになった。
 住みなれた家は強制疎開の綱でひき倒され
 東の町に小屋借りをして一家4人、
 でも、彼女の報酬は殺されたことしかない。
 生き、働いていることが殊さら人に気づかれぬほどの
 やさしい存在が
 地上いちばんむごたらしい方法で
 いまここに殺される、

上記の引用は要点を含む。というのは、殺された人が大分無邪気で、戦争と関係ないことである。それなのに、区別しないで殺された。

「その日はいつか」は全部で激しく皮肉っぽくて、峠の戦争についての苦さを示す。日本軍隊の将軍が日本の失敗が避けられないことを知っていたのに戦争をやめられないという頑固を示す。

日本の軍隊は武器もなく南の島や密林に
 飢えと病気でちりじりとなり
 石油を失った艦船は島蔭にかくれて動けず
 国民全部は炎の雨を浴びほうだい
 ファシストたちは戦争をやめる術さえ知らぬ、

峠のほのめかすのは、少女の死亡が西洋の軍隊のせいだったほど日本軍隊のせいだったということである。勿論、「その日はいつか」の少女はだれでもできる。

ダックワース・ネイサン

峠三吉『原爆詩集』

実は、少女は広島自身を象徴する。少女と同じで、広島が戦争や破壊に進んでいるのは自分のためではなくて、避けられないことである。「その日はいつか」というのは、ある少女の話だけではなくて、一九四五年八月六日の広島、広島全部の市民、の話である。とにかく、少女の場合も広島の場合も、死は威厳のない死である。

でも、「その日はいつか」というのは、悲しさも示す。

きみはそのとき思っただろうか
幼いころのどぶぞいのひまわりの花を
母さんの年に一度の半襟の香を

昔からの記憶を思い出させるが、実は、本物もこの記憶さえが戦争や原爆に破壊された。少女は死の世界の真ん中に死んでいるのである。ひまわりでもなくなった。

峠が述べる人間的な悲劇は一つだけではない。他のは「ちいさい子」に述べられる。

ちいさい子かわいい子
おまえはいったいどこにいるのか

八月六日の朝、幼い子の母親が仕事に行ったが、帰らなかった。しかし、母親だけではない。子の父親も戦争に殺された。彼の「やさしいからだ」が「砲弾に八つ裂かれた」のである。暴力的じゃない人は暴力的に殺されたが、戦争のせいでこういう死は全然珍しくない。

しかし、生き残ったのは、愛である。「微笑」という詩に、次の行が書いてある。

あのとき あなたは 微笑した
．．．
人間のわたしを 遠く置き
いとしむように湛えた
ほほえみの かけ

情愛の深い記憶がやはり残っている。でも、微笑した時が「あのとき」で、今と遠く離れているというのは痛烈である。今は微笑しない。多分できない。しかし、元気付けるのは、戦争が終わってからも、愛がまだ存在していることである。原爆でもそんなになくすることができなかった。

②・1945年8月6日の後

『原爆詩集』の二つ目の強調は広島原子爆弾の後についてである。原爆の後の月・年の間に、広島は新しくなったが、人間の記憶はそんなに簡単に変化させることができない。実際は、広島の変化でも外形的な変化しかない。原爆の前の広島は賑やかな町であったが、原爆後の広島は新しいビルが建っても、品位が落とされた浅ましい町になって来た。「友」はこの変化を次のように描写する。

<ここはどこ、どんなところですか？>

原爆の後には、ヒロシマという町があるが、原爆の前の広島とは全然違う町である。

原爆後の広島がしがっているのは、過去を忘れる・無視することである。

ダックワース・ネイサン

峠三吉『原爆詩集』

「墓標」という詩はこういう感じを簡単に要約する。

だまって だまって
立っている

つまり、広島で色々な原爆の悪の証拠が残っているが、広島市民はこの証拠を無視した方がいいと思っている。だから、原爆の邪悪の証明は無視されて、だれもなくなった人の墓の世話をしない。「墓標」にある墓は小さなものだから、目立たないし無意味にみられている。が、意味があるのが勿論である。人の死はいつもだれかにとって大切である。

お婆ちゃんは
おまつりみたいな平和祭になんかゆくものかと
いまもおまえのことを待ち
おじいさまは
むくげの木陰に
こっそりおまえの古靴をかくしている

峠が言いたい事は次のようである。「墓標」という詩にある墓は、原爆後の広島市民の原爆のせいで死んだ人についての考え方を述べる。例えば、墓自身はこういう風に述べられている。

焼煉瓦で根本をかこみ
3尺たらずの木切れを立て
割れた竹筒が花もなくよりかかっている

普通の木切れは5・6尺である。風景は、原爆のせいでなくなった子供が忘れられた荒廃の場面である。花のない竹筒が全然役立たないように、忘れられた墓標も役に立たない。墓標がしているメッセージは簡単に、時の流れに従って広島が原爆を忘れているということである。結局、

倒れた母親の乳房にしゃぶりついて
生き残ったあの日の子供も
もう六つ
とろぼうをして
こじきをして
雨の道路をうろついた
君たちの友達も
もうくろぐろと陽に焼けて
おとなに負けぬ腕つぶしをもった

つまり、赤ちゃんは子供、子供は大人ようになって来た。時が流れる。

普通の木切れは5・6尺であるが、斉美小学生の墓標のは3尺しかない。重要視しない墓は未来の幻の後ろに隠されている。

A B 広告社
C D スクータ商会
それにすごい看板の
広島平和都市建設株式会社
・ ・ ・

君たちは立っている
だんだん朽ちる木になって

ダックワース・ネイサン

峠三吉『原爆詩集』

新しい都市の後ろ、昔のも残っている。墓の位置にも威厳はない。

雨が降れば泥沼となるそのあたり

もう使えそうもない市営バラック住宅から

赤ん坊のなきごえが絶えぬその角に

その上に、「マ杯テニスコートに通じる道の角」に立っている。それが最悪の辱めである。結局、墓でもすぐなくなるので、心配する必要はない。

ああ 君たちは 片づけられ

忘れられる

かろうじてのこされた一本の標柱も

やがて土木会社の拡張工事の土砂に埋まり

つまり、広島市の市民は原爆のせいで死んだ人の墓を重要視するわけであるが、そうしない。新しい都市を作ること、過去を忘れないことより大切そうである。

しかし、既に言ったように、新しい広島があるのに、原爆の痛みを全く忘れることができない。原爆後の年の長い夜の間、被爆者が憂うつに暮らしている。原爆の前は、広島は快活の年であったが、原爆の後には、「あの日」が広島に影を投じて、物憂さや憂うつな感じがある。つまり、「夜」という詩が述べるように、広島は「なが雨の底で」ある。こういう感じは「夜」という詩に様々に述べられる。

歴史の闇に

しずかに低く

ひろしまの灯は溢れ

広島は悲しみ・絶望・不安の都市である。新しい広島は美しい少女であるが、醜い老婆の気持ちがある。酔っ払っている人の都市になった。「夜」には、

どこからかぼたぼたと血をしたたらせながら

酔っばらいがよろめき降る

河岸の暗がり

があって、「巻にて」には、次の引用がある。

傷口をおさえもせず血をしたたらせ

よろめいていった酔っばらいのかなしみ

しかし、この悲しみは表面である。原子爆弾の記憶は隠されたけど、十分には隠されない。記憶や苦しみは広島の生活のちょっと下に膿んでいる。つまり、

「巻にて」に書いているように、

それらの奥に

それらのおくに

ひとつき刺したら

どっと噴き出そうなのもの！

原爆後の憂うつは広島だけではない。周辺の町や村にも、原爆は凡人の生活をめちゃくちゃにした。「ある婦人へ」にいる婦人は表面が平和な町で住んでいる。

風車がゆるやかに廻り

菜園に子供があそぶこの静かな町

しかし、町の内面は違う。例えば、ある婦人自身は苦しく暮らす。

崩れる家にもぎとられた

ダックワース・ネイサン

峠三吉『原爆詩集』

片腕で編む
生活の毛糸は
どのような血のりを
その掌に曳くのか

広島も市民も表面的に治っているが、内面的に苦痛はもう膿んでいる。苦痛の上に、原爆はもっと長く存続する病気を引き起こした。ここは、性的なイメージが多い。広島の都市より個人的な原爆がめちゃくちゃにしたのは、精子の力をなくしたことである。広島は皆の都市であるが、精子は自分の物だから、精子がなくなる苦痛は、広島がなくなる苦痛より大変である。

皮肉っぽいのは、精子がなくなったのに、新しい広島の中に性的なイメージがどこでも見えることである。例えば、「景観」に次の行が出て来る。

列車が一散に曳きずってゆくものもカバーをかた火の包茎

しかし、本当の包茎は原爆のせいで役に立たなくなった。同じ詩の次の行も例を含む。

女はまたぐらに火の膿を溜め

やはり、何でも広島の前爆を思い出させる。前爆のせいで、性的な欲望が遂げられないのであるが、性的なイメージが所々に見える。このイメージが広島市民に前爆が自分の性的な能力をなくしたことを思い出させる。というのは、都市が再建されたのに、悩みがまだ続いているのである。でも、新しい広島に、隠され続けている。自分の精子がなくなったことを知っているしどこでも静的なイメージに見える不景気は前爆の長く残っている結果の一つで、一般的な不安がある。

「夜」に述べられる夜は特殊の夜じゃなくて、いつでもの夜である。前爆後の生活はこういう物憂さにいっぱいである。

前爆が簡単に全く忘れられないほど大変であった。例えば、前爆の後起こることの描写のしかたは前爆自身の描写と似ている。「一九五〇年の八月六日」には次の行がある。

一枚一枚 生きもののように
声のない叫びのように
ひらり ひらりと
まいおちる

「声のない叫び」は、「八月六日」の「押しつぶされた暗闇の底で 五万の悲鳴は絶え」を思い出させる。そして、皮肉に、パンフレットは「生きもののよう」であるが、前爆後の広島市民、つまり「景観」の「生きている原子族人間ならぬ人間」、は生き物のようではない。このパンフレットは前爆の被害者みたいのであるが、人間が落ちた時に暴力のせいであった。ピラが落ちるのは、平和のためである。「舞い落ちる」というのは、鳥のイメージで、同じ「一九五〇八月六日」に次の行がある。

鳩を放ち鐘を鳴らして

ピラは平和の鳩と似ている。しかし、前爆の5年後も、前爆自身を思い出させる。

広島が新しく建てられても、昔を思い出させる物が残っている。結局、広島を新しく建てたり、前爆の破壊の跡を全部消したりしても、記憶をなくすることができない。とにかく、「影」によって、色々な根跡がある。例えば、

銀行の石段の片隅
あかぐろい石の肌理にしみついた
ひそやかな紋様

原爆ドームも残っている。皮肉に、「原爆遺跡」と書いてある板はローマ字で書いてある。このような物は原爆を、「その日」や「あの朝」しかと言う必要ないほど思い出させる。原子爆弾を体験した誰もどの日かというのを知っている。

ある銀行の石段の影は今の1997年にも広島市の平和記念資料館で見える。しかし、「その日」のちょっと後、影は原爆の苦難の名残であった。具体的に、こんな苦難の名残である。

あの朝
何万度かの閃光で
みかげ石の厚板にサッと焼きつけられた
誰かの腰

うすあかくひび割れた段の上に
どろどろと臓腑ごと浴てけ流れた血の痕の
焦げついた影

けれども、都市が進んでいて、人々が影、つまり人間、に踏むことになる。影自身がどんどん衰える。ぶちこわした銀行はもうきれいである。外国の軍人が写真を撮りに行く。というのは、ちょっと無神経だと峠が思う。結局、この影が人間であった。ところが、原爆の苦しみの関心や尊敬がないように思われる。

「影」に書いてあるように、

憐れな善良で
てんと無関心な市民のゆききのかたわらで
陽にさらされ雨に打たれ砂埃にうもれて
年ごとにうすれゆくその影

市民が、影自身だけではなくて、原爆にも無関心でいる。上記の引用の最後の行は「年ごとにうすれゆくその原爆の記憶」にもなれる。

確かに、写真を撮る軍人以外、峠が所々に広島市の西洋化を述べる。例えば、「その日はいつか」という詩に、峠が原爆後の広島市の西洋化や原爆の無駄を悔やむ。

そして思いもしたろうか
此のなつかしい広島市の、広場につづく道がやがてひろげられ
マッカーサー道路と名づけられ
並木の柳に外国兵に体を売る日本女のネッカチーフが
ひらひらからんで通るときがくるのを、
そしてまた思い嘆きもしたろうか
原子爆弾を落さずとも
戦争はどうせ終っただろうにと、

やはり、外国兵が勝利者に述べられる。「景観」にもそうである。

黒人が立止まってライターの火をふり撒くと
われがちにひろく黒服の乞食ども
ああ あそこでモクひろくのつかんだ煙草はまだ火をつけている

ダックワース・ネイサン

峠三吉『原爆詩集』

疑いなく、西洋人がここでは勝利者である。日本人が乞食と同等になった。
西洋人が勝利者だから、広島がアメリカのようになると峠が書く。「影」に描写がある。

映画館、待合、青空市場
焼けては建ち、たっては壊れ皮センのように拵がる
あんちゃんのヒロシマの
てらてら頭に油が溶ける
ノンストッキングの復興に
あちこちで見つけ添えられ

少年が昔の習慣を無視する。しかし、この無視よりも、峠が嫌いなのは広島のアメリカ化である。だから、原爆後の再建を皮膚の病気として描写する。広島には、再建があるが、よくない再建であろう。この「皮セン」も原爆を思い出させる物である。なぜかと言えば、放射能のせいで、本当の皮センが被爆者の皮に拵がるからである。

建物以外、原爆を思い出させる物が他に存在する。これが被爆者である。しかし、都市が進んでいて、被爆者も苦しみを忘れたり、生き続けたりしなければならなくなる。

すべての遍歴は年月の底に埋もれて

新しい広島に、昔を思い出させる被爆者は邪魔者になったかも知れない。つまり、都市と市民が原爆を忘れたいのであるが、被爆者の存在のせいで忘れられない。恥ずかしさが友情や関係を違うようにする。「友」に書いてあるように、

さらに数年、ふたたび北風の街角で向うからやってくる
その姿があった
それは背中を折りまげ予備隊の群をさけながら
おどろくほどやつれた妻の胸にしっかりと片腕を支えられ
真っ直に風に向って
何かに追いつこうとするように足早に通っていった

描写された人は昔の友達であるが、原爆後は知り合いでもないように挨拶しないで急いで通って行く。

実は、新しい広島に、原爆の歴史の尊敬は少ない。だから、被爆者は好ましくない人間になった。大江健三郎が『ヒロシマ・ノート』に次のように書いた。

この三月二十二日午後、広島で、自殺したひとりの婦人の葬儀がおこなわれた。死者は原爆のもたらした悲慘とそれに屈伏しない人間の威厳について、もっとも秀れた詩をのこした峠三吉氏の未亡人であった。被爆による癌の恐怖が夫人をうちのめしたという噂がある。しかし、われわれはまた、夫人の自殺の数週間前、なにものかが、峠三吉詩碑をペンキで汚し、夫人にショックをあたえたということについても記憶しておかねばならないであろう。

原爆後の広島では、碑でも尊敬されない。前に書いたように、こういう原爆を思い出させる物や生き残った人たちの存在のせいで原爆を全く忘れることができないので、被爆者自身が前の苦しみを忘れ生命を進めることができない。自分が生き残ったことが毎日被爆者に原爆を思い出させる。

ダックワース・ネイサン

峠三吉『原爆詩集』

そのまま心の中を歩いてゆく
 苦痛の痕跡であった
 生き残したが、生活が全然違えられた。「河のある風景」に書いてあるように、
 おれたちも
 生きた 墓標

意味を二つするのである。最初は、「墓標」の墓のようにこの人が原爆を思い出させる物だと言う意味である。そして、生き残った生活が死みたいだという意味でもあるのである。生きているのは、墓がある死の感じである。

その上、再び心に浮かぶ思い出がある。火事についての思い出が多いのは、驚くべきじゃない。火事がどこもありそうである。「景観」に次の行がある。

ぼくらはいつも燃える景観をもつ

・・・

ぼくらはいつも炎の景観に棲む

この炎は消えることがない

この炎はやむことがない

そしてぼくらは もう炎でないと誰がいえよう

勿論、原爆が落とされた後、火事がどこもあったことは事実である。再建された広島にも、原爆の火事の思い出させる物がある。

夜の満都の灯 明滅するネオンの燦の上

新しい都市のネオンでも火を思い出させる。「景観」に、次の行もあるのである。

この炎は消えることがない

この炎は熄むことがない

引用にある炎は比喩的に広島の炎だから、いつまでも記憶に存在する。

日の間も原爆の苦しみを思い出せる。「朝」という詩の最初の行は簡単な

ゆめみる

であるが、朝であることを私たちがよく知っている。詩に述べられた人が五人で、皆が原爆のせいの身体の傷跡を持っている。皆の夢見るのは、平和的なウラニウムの使用である。こういう使用されたら、広島の伝説はいい伝説になるのである。つまり、原爆が無駄に落とされなかったということである。でも、朝に夢見るのは白日夢に過ぎなくて、白日夢は達成できない望みに過ぎない。

③・原子爆弾をもう使わない希望

『原爆詩集』の三つ目の強調は、原子爆弾をもう使用しない希望である。「呼びかけ」という詩には、峠が原爆後の広島市民を描写する。

赤むけの両腕をむねにたらし

火をふくんだ裸足でよるよると

照り返す瓦礫の砂漠を

なぐさめられることのない旅にさまよい出た

ほんとうのあなたが

このように原爆後の広島や広島市民がもだえたことを忘れるといけないう。代わりに、原子爆弾がもう全然使用しないことをしなければいけない。

ダックワース・ネイサン

峠三吉『原爆詩集』

呪いの太陽を支えるのは
いまからでもおそくはない

尋ねているのは、原爆を体験した広島市民がなにもしないで原爆をもう一度つかうことを許可できるかことである。「許可しないで」とは、「呼びかけ」という詩の呼びかけである。

峠が描写するのも、子供にの戦争の苦しみである。「ちいさい子」に、次の行が出て来る。

ほんとうのそのことをいってやる
いってやるぞ！

確かに、峠がそうする。つまり、戦争についての本当のことをいってやる。しかし、これは何だろうか。峠の考えには、次のようである。

そうだわたしは
きとおまえをさがしだし
その柔い耳に口をつけ
いってくるぞ
日本中の父さん母さんいとしい坊やを
ひとりひとりひきはなし
くらい力でしめあげ
やがて蠅のように
うち殺し
空きころし
狂い死なせたあの戦争が
どのようにして
海を焼き島を焼き
ひろしまの町を焼き
をまえの澄んだ瞳から、すぎる手から
父さんを奪ったか
母さんを奪ったか

長い引用であるが、描写するのは戦争の苦しみということである。子供は戦争との関係がないが、一番害を受ける、害を及ぼされるのはこの子供である。戦争が無益という意味である。どういう風に益したか。家族を滅ぼしたり、町も田舎も焼いたりして、つまり全然益しなかった。利益はないし、人・町・国を苦しませる。起こすのは、苦しみしかない。特に子供が砂をかむ思う。

原爆をもう使わない希望は、大人が子供に注意を払わない危険がある。戦争の考えは大人の考えで、「墓標」の子供のように、子供が無視される。しかし、平和を頼む子供の声は大人の意見ほど大切だと峠が書く。

君たちよ
もういい だまっているのはいい
戦争をおこそうとするおとなたちと
世界中でたたかうために
そのつぶらな瞳を輝かせ
その澄みとおる声で
．．．

ぼくたちはひろしまの
ひろしまの子だ と
みんなのからだへ
とびついて来い！

こどもが議論しなければならない。

峠の述べる希望も苦しんだ人が原子爆弾の落としがまた起こらないことを確実にするのである。「としとったお母さん」に書いてあるように、被爆者の苦しみや痛みがこれを確実にすることができるわけのである。

かなしみならぬあなたの悲しみ
うらみともないあなたの恨みは
あの戦争でみよりをなくした
みんなの人の思いとつながり
二度とこんな目を

人の世におこさせぬちからとなるんだ

わけのであるが、原爆後の世界は広島・長崎を忘れている。忘れると、惨事の記憶が軍隊にまた原子爆弾を落とすのをやめさせることができなくなる。だから、原子爆弾を落とすことをやめさせるのは、広島市民の任務である。

そして更に練られる原子爆殺のたくらみを
圧殺する火塊だ 狂気だ

峠の言っているのは、我々広島市民が、我らの体験、つまり火塊や狂気、に原子爆殺を妨げさせなければならないということである。

原子爆弾から覚える拒否というのも原爆の苦痛をもっと強くする。例えば、「景観」という詩に、次の行がある。

舌をもたぬ炎の踊り
肺のない舌のよじれ

こんな苦しみは広島の前爆のせいだけではなくて、原子爆弾の続いているテストのせいでもある。だから、広島の前爆の苦しみは世界中の苦痛になっている。

声のない炎がつぎつぎと世界に拡がる
ロンドンの中に燃えさがるヒロシマ
ニューヨークの中に爆発するヒロシマ
モスクワの中に透きとおって灼熱するヒロシマ

結論

『原爆詩集』の分け方は峠の強調を示す。つまり、テーマはこの三分である。

- 1・広島の前爆
- 2・前爆の投下後の広島
- 3・原子爆弾が再び使われないことの望み

一分目に、峠の描写するのは、前爆のせいの苦しみ・破壊・恐怖である。全てが変わったと言う。つまり、広島という都市は人間っぽい、人間自身は動物っぽくなった。早速に死んでしまった人の運がいいと思うほど大変だったと峠が書く。

そして、二分目に、前爆のせいの早速の損害以外、長い間に残っている苦しみ

ダックワース・ネイサン

峠三吉『原爆詩集』

があることが述べられる。再建された広島でも、触れられない不安が残っている。

ひとつき刺したら

どっと噴き出そうなのもの！

原爆の体験はいつまでも忘れないことである。新しい広島にも、原爆を思い出させる物がいっぱいあるのである。要約として、「希い」と言うのが最後の詩であることは適当である。述べるのは友達の損失、広島での損失である。つまり、詩の感じは苦い。ところが、将来への希望もある。

こういう希望は詩集の三分目になる。他の二つの部分は原爆を再び使わない望みの弾薬である。広島や広島の市民の破壊を描写して、峠がそんなに大変な爆弾が再び使われないと言う希望を提議する。平和を広げないと、広島で死んでしまった人がいつまでも安心して休めない、と峠が言っている。

しかし、『原爆詩集』は三つの部分ではなくて、一冊である。全体として本を調べることも面白い。そうすると、一番明らかなのは、原爆が全ての物に影響したことである。つまり、都市も人間も破壊したり、若い人も年寄りも殺したりした。その上、広島での原爆の投下は1945年8月6日であるけど、爆発は一秒ではなくて、数年に渡った。1945の次の数年も、原子爆弾の余波が強かった。次に、本を読むと、峠が被爆者である事は疑いなくなる。原爆を直接体験しなかった人は『原爆詩集』のような描写を決して書けない。峠の詩が作り話ではないことも疑いない。

しかし、『原爆詩集』は最後に未来に向う。今日の広島という都市もそうである。広島は過去、つまり原爆の歴史、を尊敬するのですが、その過去から進んだ。峠が今日の広島を述べた広島と比べたら面白いと思っている。峠が広島を自慢すべきだと私は思う。